

テーマ展「合戦の現場－井伊家の軍勢と集団戦－」展示作品リスト

番号	指定	作品名称	数量	時代	所蔵
井伊の軍勢とその統率					
赤備えの軍団					
1		正諫記	1冊	江戸時代 承応2年(1653)	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)
2		関ヶ原合戦図	1隻	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
3	滋賀県指定有形文化財	朱漆塗仏二枚胴具足	1領	桃山時代	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
4	滋賀県指定有形文化財	朱漆塗燻韋威縫延腰取二枚胴具足	1領	桃山時代～江戸時代初期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
5		朱地金井桁紋旗印	1流	桃山時代	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
6		金箔押蠅取形馬印	1基	江戸時代中期～後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
7		朱漆塗萌葱糸威二枚胴具足	1領	江戸時代中期～後期	彦根城博物館
8		朱漆塗畳胴・畳兜	1領	江戸時代後期	個人
9		八幡大菩薩流旗	1流	江戸時代中期～後期	彦根城博物館
10		数旗・吹流図および母衣図 (御武器并御道具類絵図・ 御家中指物武器類絵図のうち)	2枚	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
合戦の陣立					
11	重要文化財	関ヶ原合戦御備之図	1舗	江戸時代中期～後期	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
12	重要文化財	大坂冬陣図	1舗	江戸時代中期～後期	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
集団戦の指揮と合図					
13		井家軍記	1冊	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)
14		紙采配	1握	桃山時代	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
15		軍配	1握	江戸時代前期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
16		法螺	1個	江戸時代中期～後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
17		陣太鼓	1具	江戸時代中期～後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)

テーマ展「合戦の現場－井伊家の軍勢と集団戦－」展示作品リスト

番号	指定	作品名称	数量	時代	所蔵
集団戦における戦い					
戦場の武器					
18		合弓	1張	桃山時代	彦根城博物館（井伊家伝来資料）
19		征矢	5本	桃山時代	彦根城博物館（井伊家伝来資料）
20		鎌	6本	桃山時代	彦根城博物館（井伊家伝来資料）
21		稲留流砲術伝書	12帖	江戸時代 慶長13年(1606)	彦根城博物館（井伊家伝来典籍）
22		火縄銃 銘 国友藤兵衛充倅	1挺	江戸時代後期	彦根城博物館（井伊家伝来資料）
23		鍵	1本	江戸時代前期～中期	彦根城博物館（前川米男氏寄贈資料）
奮闘する井伊軍					
功名の誉れ					
24	重要文化財	太刀 銘 国宗	1口	鎌倉時代中期	彦根城博物館（井伊家伝来資料）
合戦の現場と戦功の行方					
25	重要文化財	岡本宣就乱星の母衣由来二付届書	1状	江戸時代中期～後期	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）
26		関ヶ原・大坂陣戦功覚書	1状	江戸時代 宝暦8年(1758)	彦根城博物館（三浦十左衛門家文書）
27		井島太郎左衛門書状 五十嵐軍平宛	1巻	江戸時代 慶長20年(1615)	彦根城博物館（五十嵐半次家文書）
28	重要文化財	大坂御陣備行列之次第	1冊	江戸時代中期～後期	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）
29		大坂夏の陣図	1双	江戸時代後期	個人
30		井伊年譜 巻六	1冊	江戸時代後期	彦根城博物館（井伊家伝来典籍）
31	重要文化財	討捕頭之注文	1冊	江戸時代後期	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）
32		大鳥居満正起請文	1状	江戸時代 元和元年(1615)	個人(大鳥居彦三郎家文書)
33		鉄兜	1頭	桃山時代	個人
34		五十嵐半次口上書（木俣右京宛）写	1状	明治時代 明治23年(1890)	彦根城博物館（五十嵐半次家文書）

写真解説

*番号は作品リストと一致しています。

1 正諫記 1冊

縦 24.0cm 横 16.9cm

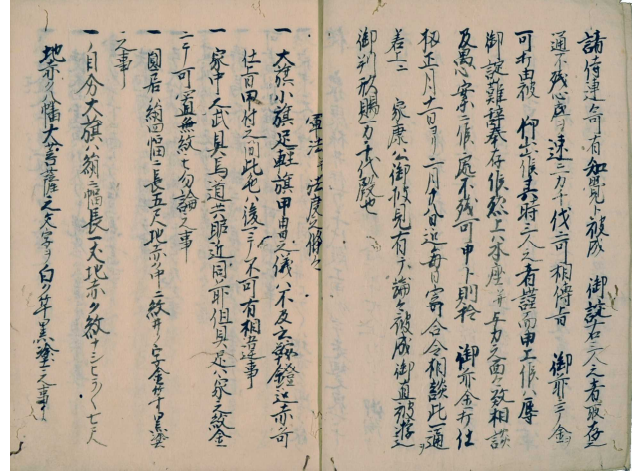
江戸時代 承応2年(1653)

彦根城博物館(井伊伝来典籍)

井伊家の軍法をはじめ、武田信玄や上杉謙信などの戦時における逸話を載せた冊子。奥書から、慶長元年(1590)9月に成立したものを承応2年(1653)に書写したことが分かります。

本書には、軍法が作成されるまでの経緯も載せられ、これによれば、徳川家康の命によって家臣の石原主膳、いしはらしゅぜん 孕石備前、はらみいしびぜん 広瀬左馬介の3人が中心となり、各面々と相談して完成したものを家康が目通した上で、彦根藩井伊家初代の直政なおまさ(1561~1602)に与えたということです。

軍法の冒頭には、「井伊の赤備え」として知られる甲冑や旗などの武具を赤で統一することが掲げられ、以降、武具の大きさや意匠、行軍や合戦時の合図や禁止行為などが詳細に示されています。



3 朱漆塗 二枚胴具足 1領

滋賀県指定有形文化財

胴高 37.0cm

桃山時代

彦根城博物館(井伊家伝来資料)

兜をはじめ、胴や籠手、臍当に至るまで朱漆塗の色鮮やかな甲冑。本作は、「井伊の赤備え」の1つで、井伊直政が関ヶ原の戦いにおいて着用したものと伝えます。彦根藩井伊家当主の甲冑の多くは、兜の脇に金の天衝を立てますが、本作にはそれがありません。

本作の胴は、横長の鉄板を数枚接いで作られており、旧来の小さな鉄板を威糸で大量に接ぐ甲冑に較べて短時間で制作することができます。また、正面と背面の部材を蝶番で留めているため、着脱も容易になりました。

集団戦が主流であった戦国時代には、限られた時間の中で大量に生産でき、容易に着脱可能な形式の胴や兜が盛んに制作されました。また、集団戦で多く用いられるようになった鎧で防具と防具の隙間を突かれないよう、兜と胴以外に、袖や籠手、垂の付いた面頬、佩楯、臍当などの小具足で全身をくまなく覆うのも当時の甲冑の特徴です。さらに本作の各部に用いられた鉄板は厚く、その重量は27kgを超過します。利便性と堅牢性を兼ね備えた1領と言えるでしょう。



17 陣太鼓 1具

鼓径 45.3cm

江戸時代中期～後期

彦根城博物館（井伊家伝来資料）

合戦や行軍の折に、多くの兵に指示を伝える方法の一つとして、鐘や太鼓などの音を出す道具が古くから用いられてきました。戦国の世の戦いは集団戦が主流であり、大勢の兵にほぼ同時に指示を伝えるためには、音を用いる伝達方法が有効でした。そのため、陣太鼓をはじめ、法螺貝や鐘、拍子木など、様々な指示具が取り入れられていきました。井伊家の軍法を見ると、それらの道具を状況に応じて使い分けていたことがうかがえます。

このうち、陣太鼓には、移動しながらでも打ち鳴らせるように、車が付いた台や背負う形式の台、雨除け用の屋根を設けた枠などが備えられているのが特徴です。本作は、江戸時代の制作ですが、雨除けの小屋根を設けた木枠に、棹を通して担ぐことができる作りとなっています。また、胴には「破軍」の象徴である北斗七星を描いており、これは、戦いの道具にふさわしい意匠と言えるでしょう。



29 大坂夏の陣図 1双

縦 158.0cm 横 357.0cm

江戸時代後期～明治時代初期

個人

慶長20年（1615）5月に起きた大坂夏の陣における若江（現東大阪市）と八尾（現八尾市）で起きた激戦の様子を、それぞれ右隻と左隻に描いた6曲1双の屏風です。徳川方と豊臣方の最後の戦いである夏の陣で、井伊家二代直孝（1590～1659）が率いる軍勢は、若江で奮闘しました。右隻は、赤備えの部隊が堤を越えて、豊臣方の木村重成隊と争っている様子が見られ、3扇目には庵原助右衛門が木村重成を引き倒したものの、安藤長三郎に手柄を譲り木村を討たせたという逸話に則した場面が表されています。このほかにも藩士の活躍する姿について、井伊家や各藩士家に伝来する古文書などの記録や逸話に基づいた例を見ることができる作品です。



34 五十嵐半次口上書 (木俣右京宛) 写 1状

石黒努 筆

縦 33.4cm 横 89.6cm

明治23年 (1890)

彦根城博物館 (五十嵐半次家文書)

慶長20年 (1615) の大坂夏の陣が終わった後に、彦根藩士・五十嵐半次が、自身の戦功に関する報告をするため家老の木俣右京に提出した上申文書の写し。その内容は、井伊軍が豊臣方と戦った若江 (現 東大阪市) において、五十嵐半次が討ち取った首を彦根藩士の正木舎人が奪ったことを説明するものです。

戦功の有無は論功行賞において重視され、後の家禄や地位に大きく影響するため、それぞれの活躍について証明する物や証人が必要でした。本状に記されるような戦功の奪い合いがしばしばあったことが井伊家や藩士家の古文書に見られ、中には自身の行為が嘘偽りのないことであると神仏に誓いを立てる者も現れるほどです。各々の活躍が目視では確認しづらくなる集団戦だからこそ、戦後の検証が必須になってきます。本状からはそうした様子うかがえるとともに、生々しい合戦の現状も伝えています。

